

活動報告書

報告者氏名：和田 博

所属：沖縄県立森川特別支援学校

記録日 平成 25 年 2 月 28 日

【対象生の情報】

- ・ 学年

高等部 1 年

- ・ 障害名

病弱（筋ジストロフィー）

- ・ 障害と困難の内容

対象生徒は進行性筋ジストロフィーの治療中である。移動は電動車椅子を使用し、車椅子の乗り降りやトイレ等の身辺処理は全面的に解除を必要としている。コミュニケーション面における困難さはない。教科書のページめくりはやっとできる状態で使用する教科書の出し入れ等の作業は職員に対応をお願いしている。

【活動目的】

- ・ 当初のねらい

筋ジストロフィーの進行によって生徒は教科書や辞書等の持ち帰り、ページをめくることも難しくなっていくと考えられる。現時点でも机の上への教科書の出し入れは職員にお願いし自分自身で学習を進めていく上での困難さが見られる。

学校や家庭での学習に教科書やプリント等は不可欠で iPad に教科書のデータを保存し活用することで生徒の学習環境（教科書の使いやすさや携帯しやすさ）の改善が図られることにより生徒自身が自分のタイミングで勉強ができ、学習のしやすさが向上すると考えた。家庭における課題学習では cloud 上に保存されたプリント等のデータの活用や辞書アプリを活用することにより勉強のやりやすさを改善し、卒業後の進学を見据えた指導の取り組みを考えた。

- ・ 実施期間

平成 24 年 5 月から 8 月まで教師の方で教科書の PDF のデータの入手方法と検討した。

- ・ 実施者

和田 博（沖縄県立森川特別支援学校 数学、情報担当）

- ・ 実施者と対象児の関係

生徒の数学、情報の授業担当者

【活動内容と対象生の変化】

- ・ 対象生の事前の状況

自宅での明日の授業の準備等は保護者に時間割を伝え鞆に教科書等を入れてもらっていた。登校後は担任に鞆の中から机の上の本立てにたててもらい次の授業の教科書を学習できるようにセットしてもらっている。

- ・ 活動の具体的内容

教科書の内容を PDF のデータにし、iPad に保存し、i 文庫 HD での活用を計画した。i 文庫 HD のアプリはページ移動の際にスライドで移動するのではなく紙をめくるような動きで移動するので紙の教科書と同じということを感じることができるので活用していくことにした。プリント等の PDF のデータは UPAD で活用することでスタイラスペン等をつかい書き込みができるように計画をした。

- ・ 対象生の事後の変化

対象生が今学年度 4 月より体調が優れず入院し絶対安静の状態の治療が進められているために授業対応が

できず取り組みを進めていくことができませんでした。

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

iPadに教科書のPDFデータ全てを入れることができれば対象生徒にとっては翌日の授業（教科書）の準備や次の時間の教科書のセッティングのお願いをしなくてもすむことはもちろん学校でも自宅でもiPadさえセットしてもらえれば自分の意志で教科書の選択、ページめくり等ができれば学習のしやすさ、環境が改善されて教育的効果は確実に上がると思えた。保護者、生徒自身の期待も高かった。取り組みを進めることができなかったのは非常に残念なことであった。

・その他エピソード（画像などを含めて）

取り組みを進めていくことはできなかったがiPadに保存した教科書のデータやプリントの活用は病院内訪問学級のクリーンルームでの授業に有効だと考え授業改善を進めていくことができた。

教科書のPDFのデータの準備の難しさをとても感じた。一部の教科書会社では指導書に教科書そのままのPDFのデータが添付されておりそのデータの活用も了解していただいた。ただほとんどの教科書会社の場合には指導書に添付されているデータがテキスト部分と画像部分が別々に保存されており活用ができなかった。PDFのデータの準備についてはこれから著作権法や文部科学省の取り組み等を注視していきたい。

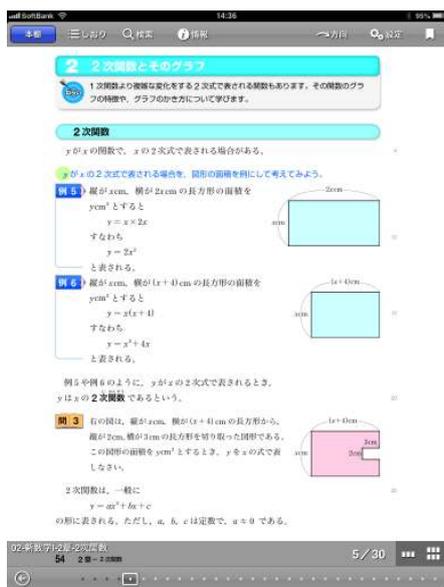


図 i 文庫 HD



図 UPAD

【対象群の情報】

- ・ 学年

森川特別支援学校病院内訪問学級に在籍している小学部から高等部までの児童生徒

- ・ 障害名

病弱（1ヶ月以上の入院で治療を必要としている児童生徒）

- ・ 障害と困難の内容

長期入院をしている児童生徒は自分自身の病気の不安以外にもほとんどの生活の場が院内となり院外に自分の居場所がなくなっていく不安を感じている。二つの不安から自分自身に対して自信や肯定感を持ってなくなってきた。

【活動目的】

- ・ 当初のねらい

森川特別支援学校ではこれまでの取り組みとして前籍校（入院前に通っていた学校）の学級と病院内訪問学級をコンピュータ、Skypeを活用し児童生徒の居場所づくりの取り組みを進めてきた。しかし、コンピュータや校内LANを活用する取り組みは中継できる場所を限定していた。iPadのような情報携帯端末の活用が図られ何処でもネットワークに接続できる環境を整えばこれまで学級に限定されていた居場所の確認が自宅周辺や通学路から学校（校内散策）、そして放課後遊んでいた公園等これまで児童生徒の居場所だったところを中継でつなぐことによりこれまで以上に児童生徒の心理的安定を図れると取り組みを考えた。

- ・ 実施期間

平成24年9月から3月まで自立活動の授業等で活用

- ・ 実施者

病院内訪問学級該当児童生徒担当者、サポート役として和田 博

- ・ 実施者と対象児の関係

病院内訪問学級児童生徒の担任、自立活動担当

【活動内容と対象群の変化】

- ・ 対象群の事前の状況

長期入院している児童生徒は健康面への自信が無くなっている以外にも投薬等治療の影響で容姿にも変化があり、自分自身に自信が持てない状態になっている。さらに病院外（自宅や自宅周辺、学校や学校周辺）の様子も保護者等からの話を聞く程度の関わりしかなく児童生徒自身の居場所がどんどん無くなっていく危機感を持っている。児童生徒は自分自身に自信を無くしていることから自己肯定感も低くなってきている。

- ・ 活動の具体的内容

児童の自宅の玄関前から学校までの登校の疑似体験、併せて校内散策に取り組むことができた。児童が学校までの道順を案内していく形をとって中継を続けていった。「ここからまっすぐの道に行くと従兄弟のお家がある。」など教師に説明をしながらとても興味をもって画面を見つめていた。時にはそこで止まって一回ぐるっと回ってみてとか中継のリクエストをするほどだった。

校門に着いてからは教師主導で玄関から教室までの行き方を中継し、その後校内散策を行った。教室、保健室、体育館等の散策を興味深く見ていた。擬似的な体験であったが児童は興味深く自分が通っていた学校、通学路を見ることができた。

- ・ 対象群の事後の変化

これまでの教室での授業のみの中継でも十分に効果があったのだが、通学路の中継で児童生徒が道案内をするという取り組みは児童生徒がリードすることでより児童生徒に自信をもたせることができた。その取り

組みの後に教員や担当医との会話でも今まで以上に話題が拡がりこれまでの児童生徒の学校や自宅での生活の様子を話すようになった。

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

情報携帯端末を活用した中継ということで機動性という特徴を十分に活用して取り組みを進めていくことができた。偶然の産物であるが児童生徒に道案内をさせるという取り組みは児童生徒が主体の取り組みであるということを再認識することができた。道案内をしている声も自信に満ちあふれていた。自分の居場所であったところが今も変わらずにあるということと確認ができ職員にも紹介することができたということが自信につながったと考えられる。

・エビデンス（具体的数値など）

自己肯定感を高めることをねらいとした取り組みなので結果を数値化することが難しい。ただ保護者や周りの教員、担当医からは会話することが増え治療に対しての気持ちも高めることができる取り組みになっていると評価されている。

・その他のエピソード

該当の児童が取り組んでいる様子を見ていた他の児童が「次は私ね」的なことを言っているのを聞いて入院している児童生徒が外の様子にとっても興味を持っていることを確認することができた。入院している児童生徒が自信を持って退院後の世界に参加していくことができるよう取り組みを考え実践していきたい。



図 学級での視聴の様子



図 中継先での端末の画面（FaceTime）